

今回の伸びはやや鈍い～米小売売上高

2019年5月13日(月)

米中通商協議などの動向に注目が集まる展開が続いています。同問題などもあって一時は懸念が広がっていた両国経済の鈍化ですが、直近の経済指標が比較的力強いこともあって、懸念は後退している状況。

もっとも、4月の米雇用統計、非農業部門雇用者数が予想を上回り、失業率に至っては49年ぶりの低水準と力強さが継続しているものの個人消費に關係する平均時給の伸びが鈍く若干の警戒感を誘いました。

そうした中、15日に4月の米小売売上高が発表されます。

米国の小売売上高は2月分が前月比-0.2%、自動車を除くコアの前月比が-0.4%とかなり低く、同月分の雇用統計の弱さもあって警戒感を誘いました。もっとも天候要因(1月末から2月の寒波)が指摘される中で3月分の数字が前月比+1.6%、同コア前月比+1.2%と力強い回復を見せ米個人消費の底堅さが意識される展開となりました。

前回分の内訳を確認してみましょう。

目立ったのが自動車とガソリンスタンド売上の上昇。自動車は2月分の前月比-0.1%から+3.1%に。ガソリンスタンド売上は2月分の前月比+3.5%と同じ+3.5%になっています。2月分が-1.9%と冴えなかった食品・飲料が+1.0%と回復したことも全体を支えました。同部門は売上額自体が大きいこともあり寄与度でみると、自動車の+20.5%に次ぐ+12.2%に上っています。その他の項目もほとんどが前月比でプラス圏。マイナス圏はスポーツ・趣味・書籍の一部のみでそのマイナス幅も-0.3%と小さいものです。

こうした状況を受けて今回の小売売上高ですが、予想は前月比+0.2%とやや鈍いものとなっています。もっとも自動車を除くコアの予想は同+0.7%と全体に比べるとおとなしいものに。

4月は米国の自動車販売が総じてさえず、自動車部門がマイナスとなる可能性が指摘されています。GMなどが月次販売台数ではなく、四半期販売台数に変更していることもあり全体の数の比較は難しいですが、FCA(フィアットクライスラー)が前年同月比-6.1%、トヨタが前年同月比-4.4%と冴えない数字に。金利の上昇傾向が自動車ローン負担増になり、販売が手控えられたとみられ、比較的単価の高いFCAの主力車ジープなどの売上が鈍ったとみられます。

3月の住宅着工件数が2017年以来の低水準に沈み、二カ月連続で低下するなどここにきて米住宅市場がややさえないことなども全体の警戒感を誘っています。住宅市場の低迷は建材部門に加え、家具、電気製品などの売上にも影響するだけに全体の重石となっている可能性があります。

一方で前月同様にガソリンスタンド売上はかなり伸びそう。米国のガソリン小売価格の月次平均(全米全種平均)は、2月が2.393ドル、3月が2.594ドル、4月が2.881ドル(いずれも1ガロン当たり)とかなり上昇しています。ごく一部の都市部を除いて自動車が生活の足となっている米国ではガソリン高でも売り上げがそれほど鈍らず価格上昇が販売総額上昇につながりやすい分3月から4月のガソリン価格11%高が小売売上高にはプラスに作用すると思われる。

こうした状況を考えると今回の予想前月比+0.2%、同コア前月比+0.7%は比較的リーズナブルな数字に見えます。前回は強すぎた分、数字的なインパクトにかけますが、コアの+0.7%もしくはそれ以上の数字が出てくると、ドルにとってはサポート材料になりそうです。